陸軍登戸研究所

2012年作品・長篇ドキュメンタリー映画（カラー 二四〇分）

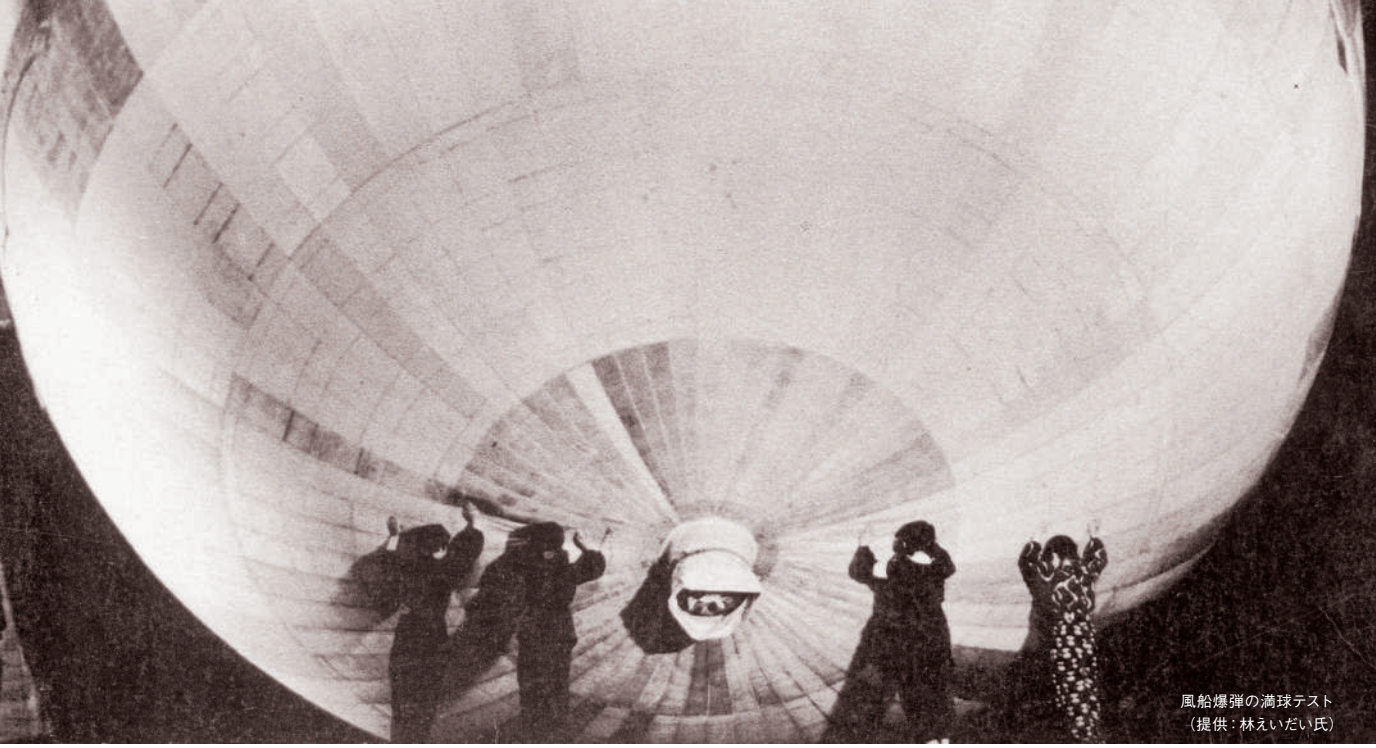
さきの戦争を裏で支えた秘密戦・謀略戦の兵器開発基地。極秘だったため「消された研究所」ともー
今、関係者がカメラの前に立って証言する。

2025年8月11日［月・祝］
13:00 上映（12:45 開場）
川崎市アートセンターにて
12年ぶりに＜完全版＞を上映！

殺人光線 電波兵器
生体実験への道 毒物・爆薬の研究
風船爆弾 生物・化学兵器
二セ札製造 対英経済謀略

監督・編集：楠山忠之

原案／日本映画学校「人間研究」
製作／アジアディスパッチ
宣伝・配給／陸軍登戸研究所映画製作会



風船爆弾の満球テスト
（提供：林えいだい氏）

殺人光線や電波兵器、爆薬の開発。毒薬による人体実験。渡洋爆撃の代案としての風船爆弾。中野学校（スパイ養成所）と組んでの対支謀略作戦における偽札製造。
陸軍科学研究所の中でも最も莫大な資金を与えられ、新兵器の発案に期待を託された「登戸研究所」。1937年12月、南京占領と相俟つかのように川崎市生田の丘陵地に研究棟を建て、敗戦の日まで極秘のベールの中で資源なきニッポンの戦争に智力で勝とうとした。

戦争は誰のために続けたのか

登戸研究所の闇を辿る本作から、図らずも原発ムラと相似する構図が浮かぶ

スーツ姿や平服。サラリーマン生活そのものの研究所。だが仕事は「人殺し」や謀略のための兵器づくりだ。戦場から遠く隔絶したこの地に血の匂いはなかった。近隣の寒村からじっちゃんばっちゃんまでもが、現金収入を求めて集まって来た。徴用逃れの道でもあった。
戦後、証拠湮滅命令で「消された秘密研究所」と言われてきた。歴史の闇に光を当てるべく、2006年から少なくなった当事者を訪ね歩き、いまここに初めて「登戸研究所の真実」を記録した長篇ドキュメンタリー映画が完成した。カメラの前に立った証言者40数名の勇気と、語り継ぐ決意が結晶となった作品となった。

東京新聞（2006年8月30日付）
取材・撮影開始から3年間は日本映画学校生たちが担う

登戸研究所ドキュメンタリー制作中
旧軍施設の実態に光
日本映画学校生
「普通の人が時代に利用される怖さ感じる」

プロデューサー・監督・編集●楠山忠之
撮影●新井愁一●長倉徳生●鈴木摩耶●楠山忠之
録音●渡辺露子
編集技術●長倉徳生
朗読●石原たみ
聞き手●石原たみ●渡辺露子●宮永和子●楠山忠之
ナレーション●楠山忠之
ムックリ演奏●宇佐照代（アイヌ料理「ハルコロ」）

▼12 年ぶりに 1 時間長い〈完全版〉を上映！
舞台挨拶 楠山忠之監督、石原たみさん（スタッフ）

2025.8月11日［月・祝］
13:00 上映（12:45 開場）
※途中休憩あり
会場：川崎市アートセンター 小劇場

料金：2,000 円均一
※シネマ会員ポイントつきます
157 席｜自由席｜整理番号順入場
◆チケットは 7/22［火］より窓口にて販売開始

小田急線「新百合ヶ丘駅」北口より徒歩3分
川崎市アートセンター
044-955-0107 https://kawasaki-ac.jp